大工と鬼六

むかし、あるところに
流れも速き大川ありて、村人、橋を架けれども、大雨降れば流されて、大風吹けば落とさるる。
困り果てにし村人ども、辺り一番の大工に頼む、大工、合点と請負いしが
見れば見るほど難儀な川よ、思案に暮れているところへ

突然泡だつ川の水、小島のような角と髪、大きな目玉に大きな口で赤い顔、現れいでしは鬼なりき
「おい、おまえは何をしておる」
「橋を作る思案をしておる」
「人間ふぜいにはできぬことを。その目ん玉をよこすなら、わしが作ってやるわい」
「どうだかなあ」

とは言いしが気になりて、翌朝大工が来てみれば、橋が、橋ができているではないかいな

「見ればみるほど立派な橋よな
杭柱(くいばしら)の隆々と、橋桁(はしげた)組みのほれぼれと、張り出す太鼓のまろみはどうだ、おまけに擬宝珠(ぎぼし)もキレキレだあな」
「よう来たな、早うおまえの目ン玉をよこせ」
「ま、待ってくれ」
構うことなく赤鬼の掴(つか)みかからん手をよけて
「待ってくれ。目玉がなければなんにも見えぬ。大工で鳴らす名が立たぬ。それにまた、こんな立派な橋さえも見られぬ不幸もありますまい」
思いのほかの言い立てに、鬼はじろりと睨(にら)みつつ
「待てないことだが待ってやる。明日の朝、ここで、おれの名前を言うてみろ、さすれば目玉は許してやろう。明日の朝だぞ、逃げるなよ、逃げても逃げても追っかけるぞよ」

それからどこをどうしたか　途方に暮れて山の中
下草に脚をとられ　梢の風に身はすくみ　転げ転げて見上げれば
なぜに月影ばかり　こんなにも静かだ
(遠くからわらべ歌)鬼六が　目ん玉持って
――や?

（わらべ歌）鬼六が　目ん玉持って　はよう帰れ　はよう帰るが　ええがのう
有難き地獄の中に神仏、鬼も十六、番茶も出ばな、いやいや奴は鬼六なるべし、翌朝大工は夜明けとともに、橋のたもとにやって来た

「さあ、おれはなんて名だ」
「ええと、そうだな、おまえは鬼一だ」
「そうら違った、覚悟はいいか」
「待ってくれ、そんならおまえは鬼二だな」
「それも違った、さあ目ん玉を」
「鬼三だ」
「早くよこせ」
「鬼四だ、いや鬼五だ…今、なんどきだ?」
「六つかな」
「鬼七だ、いいやおまえは鬼八だ」
「ま、待ってくれ。もういっぺん、やってみてくれ」
「なんだって?そんならやるぞ、おまえは鬼一だ」

「そうら違った、覚悟はいいか」
「そんならおまえは鬼二だな」
「それも違った、さあ目ん玉を」
「鬼三だ」
「早くよこせ」
「鬼四だな、いや鬼五だな、…今、なんどきだ?」
「六つかな」
「鬼七だ」
「ううんん」
「おにろくだ!」
「やあ、知っていたかあ」
たちまち起こる大渦巻の　しぶき嵐か雨つぶて、うねりて笑う大音声は遠く山々にこだまして、後しらなみと消えうせり
大工は川に手を合わせ、六の橋とぞ名づけける
むかしむかしのことなりき